

泌尿器科にハイブリッドツリウムYAGレーザーが入りました！／みどり市民病院

泌尿器科に受診される患者さんの中で、最も多い症状や病気は頻尿など「おしっこ」に関する事、そして時には救急車を呼ぶぐらい痛くなる尿管結石でした。そして、この1年で携わった手術で最も多かったのも前立腺肥大症や尿管結石に対する手術でした。そこで、2024年5月に手術機器ハイブリッドツリウムYAGレーザー-RevoliX HTL™を導入いたしました。

一般的に前立腺肥大症はツリウムYAGレーザー、結石はホルミウムYAGレーザーで治療されますが、ハイブリッドツリウムYAGレーザー-RevoliX HTL™は1台で前立腺肥大症に対する「経尿道的前立腺レーザー蒸散術」、尿管結石に対する「経尿道的尿管結石碎石術」が可能です。そして結石破砕においてはホルミウムYAGレーザーより、患者さんに優しく、かつ、確実に治療効果を発揮することができます。今後益々安全に確実な手術を提供できるよう取り組んでまいります。

文責：みどり市民病院 泌尿器科 経営課



みどり市民病院・みらい光生病院の医師らが執筆した名市大ブックが発売されました／みどり市民病院・みらい光生病院



丸善 ヒルズウォーク徳重店 未来屋書店 イオンモール長久手店

この度、名市大ブックの新刊「第17巻 予防医療が紡ぐ幸せな健康未来～みどり市民病院・みらい光生病院の挑戦」を7月31日に発売しました。健康長寿の最新予防医療について、両病院長はじめ両病院の医師を中心に、また本学医学部の同門である中西 真 前医学部教授(現:東京大学医科学研究所 所長)にもご執筆いただくなど、最新の研究成果をもとに多彩な専門家が解説しています。ご購入は、各附属病院の売店や各キャンパスの生協、全国の書店やECサイトまで。

～フェア開催～
みどり市民病院・みらい光生病院では、近隣の書店でフェアを開催し、病院紹介や執筆者による著書の紹介を掲示し、販売促進のPRとともに地域の皆様に病院が身近に感じられるよう取り組んでいます。

文責：みらい光生病院 経営課



THEインパクトランキング2024総合ランキングで6年連続国内公立大学1位!

2024年6月12日、イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」が発表したTHEインパクトランキング2024において、本学は総合ランキングで世界301-400位、国内同率14位(6年連続公立大学1位)になりました。

これは、国連が掲げる「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals (SDGs)」に対して、大学がいかに取り組み、社会に影響を与えているかを可視化したランキングです。第6回目となる今回は、総合ランキングに1,963大学(前年は1,591大学)がランク付けされました。

SDG別のランキングでは、本学はSDG3「すべての人に健康と福祉を」において世界同率85位、国内8位、SDG12「つくる責任つかう責任」において世界同率201-300位、国内同率9位となるなど、高い評価を受けました。

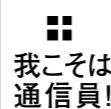
今後も本学では、世界をリードする大学を目指し、国際社会共通の課題に積極的に取り組んでまいります。

文責：企画課



広報誌：瑞医(ずい)
発行：〒467-8602
名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
TEL (052) 858-7529 FAX (052) 851-4801

URL <https://www.nagoya-cu.ac.jp/>



我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話をお届けして下さるサポーター大募集!
「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、E-Mail: hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp
病院管理部経営課経営係 広報担当まで

*次号の発行は2025年1月下旬発行予定です。【年3回 1月・5月・9月】



世界に羽ばたくMEDIPORT
2024.10.VOL.54

極 社会貢献
Social contribution

人 時の人
People in the news

技 研究
Current topics in research

和 お知らせ
Information

2024年度 夏のオープンキャンパス

2024年8月3日に医学部・医学科、4日に2025年度から開設予定の医学部・保健医療学科リハビリテーション学専攻(仮称)の「夏のオープンキャンパス」が名古屋市立大学桜山キャンパスで開催されました。

医学科のオープンキャンパスでは、午前と午後の部の両方でさくら講堂がほぼ満席の中、医学部の紹介、学校生活の説明、入学試験の説明、医学部生からの学生生活の説明、模擬講義が行われました。本年度の模擬講義では「肺がん」をテーマに、前半は実験病態病理学の高橋智教授が肺がんの分類とその病理診断について、後半は呼吸器・小児外科学の奥田勝裕教授が手術支援ロボットを用いた肺がん手術について手術中の映像を用いながら講義をされました。講義では診断から手術までの流れをお二人の教授が分かりやすく丁寧に説明されたため、参加している学生も講義に引き込まれ真剣に聞き入っていました。オープンキャンパス終了後に設置された個別相談では、入学試験、入試対策、入学後の大学生活などのさまざまな質問に医学部生と教員が対応し、医学科の特色、良い点などをより細部まで学生に伝えることができたのではないかと思います。

保健医療学科リハビリテーション学専攻のオープンキャンパスでは、申し込み段階から当初の予想を超える関心を学生の方々からいただき、急遽参加定員を倍増して臨みました。オープンキャンパスでは、保健医療学科リハビリテーション学専攻の紹介、理学療法学・作業療法学コースの紹介、入学試験の説明を学生と保護者に対して行いました。説明の後には個別の相談時間を設け、入試対策や新学科のメリット・デメリット、学校生活などについて質問があり、教員を中心に対応しました。また、学生を対象としたリハビリテーション体験では、名古屋市立大学病院とみらい光生病院のリハビリテーション技術科の職員が8つの体験ブース(バランス、歩行、ロボットなど)を設置し、病院で行われている理学療法と作業療法の実際を体験していただきました。この体験では、病院で治療に携わっている理学療法士と作業療法士から直接話を聞くこともでき、学生の方々には将来のキャリアを考える上で非常に良い機会になったのではないかと思います。

最後に、オープンキャンパスの開催にあたり、ご尽力賜りました教員、職員、医学部生の方々に厚く御礼を申し上げます。

文責：副医学部長(入試担当) 加藤洋一・リハビリテーション学専攻準備教員 野嶋一平



“瑞医の由来”

『瑞医(ずい)』という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

多種多様な行政課題・地域課題の解決に貢献 「共創まちづくり研究推進事業」を開始しました


昨年12月に「なごや先端研究開発センター」を設置し、自己財源に加え、名古屋市や企業等の支援・連携による「なごや共創研究基金」の資金を活用しながら、研究力強化を推進しています。


2024年7月、当センターにおける新たな研究力強化の取り組みとして、名古屋市の協力・連携のもと、「共創まちづくり研究推進事業」を開始し、2024年度から2年度にわたり取り組む50件の研究課題を採択しました。

「共創まちづくり研究推進事業」とは

- 名古屋市を始めとした多様な主体と連携・協働して、大学提案型による行政課題、地域課題の解決や地域の発展を目的に、独創的・先駆的な学術研究、また、地域のまちづくりや市民の健康増進に寄与・貢献する応用研究等に対し、研究費（共創まちづくり研究推進費）を2年度にわたって支援する制度。（1件あたり最大100万円／年）
- 行政課題、地域課題の内容は、少子化・健康長寿、子育て・キャリア支援、DX・イノベーション、災害対策・環境保全、スポーツ、SDGs、多文化共生・異文化交流、ビッグデータ解析、ライフサイエンスなど多岐にわたる。
- 本学の研究シーズと地域ニーズを共有・マッチングし、研究成果の社会実装、地域貢献につなげ、自治体・民間等からの寄附講座設置・共同研究の促進を図っていく。

研究2年目(2025年)の時点で、発展・展開が期待できる研究課題は、名古屋市職員や市立大学教職員等による研究内容のヒアリングや、名古屋市による課題解決への貢献度評価などを経て、寄附講座の設置や共同研究等の実施を目指します。また、本事業を通じて学内の研究を活性化させ、研究の知見を地域社会に還元し、産学官で共創しながら地域の発展・成長により一層貢献してまいります。

採択された50件の研究課題はこちら → 

文責：研究開発課 

No	所属	補職	氏名	研究課題名
1	医学研究科	教授	高桑修	名古屋市大附属病院群の医療系多職種が共創する新しい多職種連携教育の開発
2	医学研究科	教授	上島通浩	子どもの健康生活指標となる尿バイオマーカー開発と親子への情報提供方法の検討
3	医学研究科	教授	瀬尾由広	名古屋オリジナルの心不全手帳活用による心不全診療の改革
4	医学研究科	教授	片岡洋望	癌細胞超選択的集積性を有した光感受性薬剤による次世代 PDT の開発
5	医学研究科	教授	野高一平	老化予防のためのレジリエンス指向デジタル・バイオマーカー開発
6	医学研究科	教授	澤本和延	神経再生による脳機能回復：市民の健康改善に向けた革新的プロジェクト
7	医学研究科	教授	松川則之	記憶障害早期診断マーカーの開発と検証
8	医学研究科(みどり市民病院)	教授	藤田義人	新興感染症に対応する外来機能の構築に関する研究
9	医学研究科(みどり市民病院)	教授	藤田義人	病院食フードロス削減と食物再利用に関する研究
10	医学研究科	寄附講座教授	野村洋	記憶の想起障害を回復させる神経機構の解明
11	医学研究科(東部医療センター)	准教授	高木博史	お酒の代謝能力の個人差に基づいたNCDs対策の構築：アルコール代謝関連遺伝子と動脈硬化性疾患の関連
12	医学研究科	特任准教授	川出義浩	地域在住高齢者の災害時の薬物療法継続に関する意識調査 - 要因分析から地域特性に基づく災害対策強化を目指す -
13	医学研究科	講師	後藤志信	原因不明不慮におけるプロゲステロン感受性遺伝子の同定と機能解析
14	医学研究科	講師	成田朋子	産休・育休中の女性血液内科医の専門知識と経験を生かした診療支援の開発
15	医学研究科	講師	内田恵	周産期の父親の不安と抑うつを軽減するためのスマートフォンアプリの開発
16	医学研究科(東部医療センター)	講師	今井一徳	災害時に職員が参集できるかを予測するためのトリアージの開発
17	医学研究科(みどり市民病院)	講師	山田敏之	医療 ICT を活用した「なごや医療 [DX] モデル」の確立
18	医学研究科	助教	岩田幸子	睡眠障害の在宅評価からの育児環境の改善
19	医学研究科(東部医療センター)	助教	和知野千春	医療ビッグデータとAIを活用してコロナ社会の課題解決を目指す～新型コロナウイルス感染症後の後遺症リスク低減による豊かな暮らしの実現を目的としたAIによるデータ駆動型予測システムの構築～
20	医学研究科	研究員	宇佐美球也	介護保険・レセプトデータベースによる大腿骨近位部骨折のリスク推定～ AIモデルを活用した介護予防プログラムのエビデンス構築～

生物多様性に関するシンポジウムを名古屋市と共催しました

2024年3月24日、本学の理学研究科附属生物多様性研究センターは、名古屋市環境局なごや生物多様性センターと「なごや生物多様性シンポジウム2024～みんなであつなごや生物多様性の未来～」を共催しました。

会場となった田辺通キャンパス宮田専治記念ホールには当日、12校の高校・大学からの約100名の参加者を含めて200名以上が来場し、大盛況でした。第一部：生物多様性調査の専門家によるなごやの希少種報告、第二部：高校生・大学生が日頃の活動成果を発表するポスターセッション、第三部：名市大の研究者による生物多様性・SDGs研究報告の三部構成で行われ、普段なかなか接点がない専門家・研究者と高校生・大学生が交流する良い機会となりました。

看護学研究科の尾崎康彦教授(医学部附属西部医療センター前副病院長)による第三部講演の様子は、本学SDGsセンターのウェブページからご覧いただけます。



シンポジウムの様子

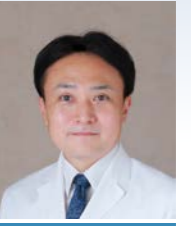


文責：企画課

新任教授紹介

法医学 大島 徹 教授

2024年7月1日付けで、名古屋市立大学大学院医学研究科法医学分野教授を拝命いたしました大島徹と申します。私は、これまで熊本、秋田、三重など、法実務(解剖や検案、創傷鑑定等)が比較的多い大学で研鑽を積んで参りました。これら法実務の経験から着想を得た乳幼児揺さぶられ症候群(Shaken Baby Syndrome)の眼所見の研究や入浴死(入浴中の原因不明の溺死)の研究、死後撮影CTの研究などを行っております。また、東日本大震災では延べ1か月間、岩手県で多数死体の災害対応の経験をし、本年1月の能登半島地震でも現地で検案を行って参りました。これら法実務から得られた知見を、名古屋市、愛知県の皆様に還元できるよう、情報発信していきたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

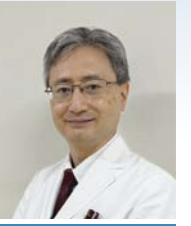


大島 徹 教授

新任教授紹介

東部医療センター 消化器外科学 松尾 洋一 教授

2024年7月1日付けで、名古屋市立大学医学部附属東部医療センターの消化器外科教授を拝命いたしました松尾洋一と申します。謹んでご挨拶申し上げます。私は1994年に名古屋市立大学を卒業し、当時の第1外科学教室に入局しました。学位を取得後、2006年よりJMD Anderson Cancer Centerに留学し、最先端の癌研究に没頭いたしました。帰国後は、大学院生とともに研究を継続しつつ、肝胆膵外科の臨床に従事しております。なかでも膵臓を専門とし、悪性度の高い膵癌に対して手術を基軸とした積極的な治療を行ってまいりました。それに加え、手術の難度が高い慢性膵炎の外科治療に取り組んできたのも教室の特徴で、他県からも多くの患者様をご紹介いただいております。東部医療センターは腹部救急にも力をいれてきた実績があり、若手外科医の臨床力をさらに飛躍させる教育システムの構築を目指す所存です。今後もご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



松尾 洋一 教授

新任教授紹介

東部医療センター 脳神経外科学 相原 徳孝 教授

2024年6月1日付けで名古屋市立大学医学部附属東部医療センター脳神経外科教授を拝命しました相原徳孝と申します。私は、1988年に名古屋市立大学医学部を卒業し、静岡医療センターにて研修を行ったのち1989年に名古屋市立大学大学院に入学し、脳血管障害に対する機能再建・移植について研究を行い、医学博士をいただきました。名古屋市立大学医学部附属東部医療センターには大学院卒業後の1995年から1998年まで脳神経外科医師として勤務しておりました。自分の専門分野である脳血管内治療と頭蓋底外科手術はこの時から勉強してきたものです。その後、名古屋市立大学病院へ戻り、当時の耳鼻咽喉科教授であった村上信五先生よりたくさんの方の聴神経腫瘍症例をご紹介いただき手術を行ってきました。2022年4月より診療科部長として再び当院にお世話になっておりますが、かつて自分がこの病院で勉強してきた時の経験をもとに、若手医師を育成し、地域住民の皆様へ信頼される医療を提供できるよう努力していきたいと考えておりますので宜しくお願い申し上げます。

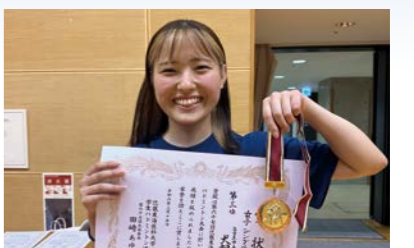


相原 徳孝 教授

時の人

バドミントン大会で優勝! 2023年度「瑞躍賞」受賞者 医学部2年生 犬飼 乃愛さん

医学部2年の犬飼乃愛と申します。私は小学生の高学年から今まで約10年バドミントン続け、今は医学部バドミントン部に所属しています。医学部バドミントン部は経験者の人も大学始めの人も所属しています。週に2、3回練習があり、練習メニューはとてもハードですが、優しくとても面白い先輩方と同期、後輩と一緒に練習に打ち込んでいます。医療系の大会に主に出場しており、特に西医体では部員全員が一同となって、団体戦、個人戦の応援で盛り上がるので毎年の西医体をとても楽しみにしています。西医体で優勝することを目標にして、部活がない日は外で走ったり、フットワークをしたりしています。これからも大学生生活でしか味わえない部活に熱中して、先輩方、同期、後輩と日々練習を頑張っていきたいと思っております。

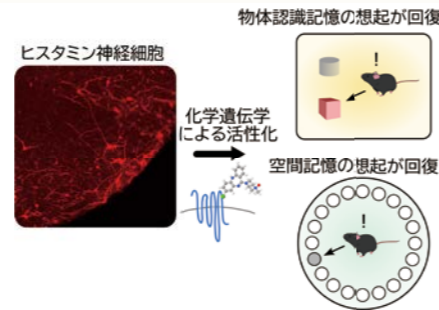


犬飼 乃愛 さん

忘れた記憶を再び思い出せるようにする神経細胞
～記憶障害の改善を目指した取り組み～

学習や経験をしてから長い時間が経過すると、そのときの記憶を思い出しづらくなります。加齢や神経変性疾患、精神疾患によってこうした忘却の過程は加速し、生活の質を著しく低下させます。本研究では、脳内の視床下部の一部に存在する結節乳頭核ヒスタミン神経細胞の活性化によって、忘れた記憶を再び思い出せるようになることを発見しました。物体記憶と空間記憶の両方で効果を確認し、物体記憶の想起改善に嗅周皮質のヒスタミンH₂受容体が関与することを明らかにしました。体内でアレルギーに関わる物質として知られるヒスタミンですが、脳においては覚醒や認知機能に重要です。本研究成果は、脳内ヒスタミン神経細胞の働きや、記憶を思い出す神経メカニズムの解明に有益であるとともに、認知機能障害の治療薬開発の一助となることが期待されます。

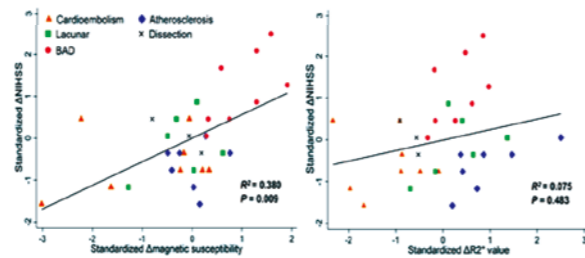
文責：脳神経科学研究所 認知機能病態学寄附講座 野村 洋 寄附講座教授



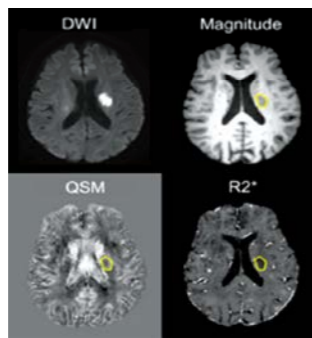
脳梗塞後のリハビリテーション患者に対する新しい画像評価法の確立
—脳梗塞後の虚血巣における鉄と髄鞘の縦断的变化と神経学的予後との関連—

脳梗塞における適切なリハビリテーション介入によって、患者の脳虚血巣では脳組織の再生が促進され、失われた機能が改善し、生活の質の向上と社会復帰を目指すことが可能となります。本研究では、脳梗塞を発症してリハビリテーション介入を行った患者を対象として、最新のMRIを用いて脳虚血巣の鉄沈着量と髄鞘化の程度と神経学的予後との相関を調べ、脳虚血巣における磁化率の経時的変化が神経学的予後と関連していることを発見しました。この技術により、リハビリテーション効果を客観的に評価することで、回復過程の脳組織変化のより詳細な理解が深まり、治療計画を最適化するためのツールとして活用できる可能性があります。

Scatter plot and Linear regression



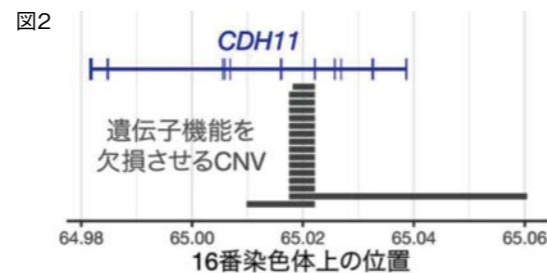
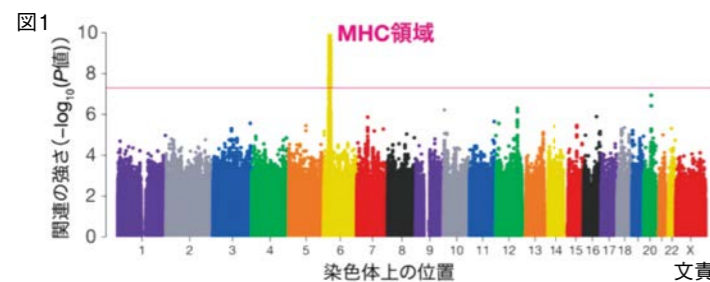
文責：リハビリテーション医学分野 植木 美乃 教授



不育症（習慣流産）の発症に関わる遺伝子の発見
—免疫学的妊娠維持機構と細胞接着分子の関与が明らかに—

不育症は「流産あるいは死産が2回以上ある状態」と定義され、妊娠を望むカップルの約5%が罹患しています。主な原因として抗リン脂質抗体症候群、子宮奇形、夫婦染色体転座、絨毛染色体異常性が挙げられますが、約50%は原因不明となっています。

我々は原因不明不育症1,728名のゲノムデータと、バイオバンク・ジャパンが保有する24,315名の対照のゲノムデータを用いて、ゲノムワイド関連解析(GWAS)を実施しました。その結果、不育症関連遺伝子変異(rs9263738)をMHC領域に同定し(図1)、さらに細胞接着分子であるカドヘリン11(CDH11)遺伝子のコピー数多型(CNV)が多くみられることを同定しました(図2)。本研究は不育症に関する過去最大規模のGWASであり、原因不明の病態に免疫学的妊娠維持機構と細胞接着分子が関与することを示しました。今後の原因不明不育症の病態解明や新しい診断法や治療法の開発に繋がることが期待されます。



文責：産科婦人科学分野 矢野 好隆 病院助教、杉浦 真弓 教授

インドネシア・ブラビジャヤ大学 医学部長一行が来学しました

2024年4月23日、24日に本学の国際交流拠点校であるインドネシア・ブラビジャヤ大学の医学部より、学部長をはじめ4名が来学しました。

4月23日は教授会での挨拶ののち、郡理事長、浅井学長との面会で親交を深めました。4月24日の午前中は高橋研究科長らとともに意見交換会を開催し、両校の学部生・大学院生・研究者の各々のレベルで、将来どのような交流ができるかという話し合いを行いました。すぐにも交流が開始できる内容も多くありましたので、今年からスタートしていきます。ブラビジャヤ大学からの留学生2名を交えたランチのあと、桜山の附属病院と西部医療センターの陽子線施設を見学しました。

NICUでは臨床実習中の学部生と言葉を交わす場面もあり、二国間の医学部生の違いなど、学生も興味深く聞いていました。特に陽子線センターに高い関心を示すなど、今後の両校での幅広い交流に繋がることが期待されます。



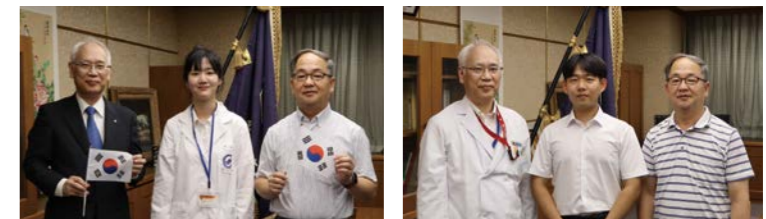
文責：医療人育成課

ハルリム大学の留学生を受け入れました

医学部では例年、国際交流協定に基づく学生交流の一環として、大学交流協定校である韓国のハルリム大学より留学生を受け入れています。新型コロナウイルス感染症の影響により数年受け入れを中止していましたが、昨年に引き続き、今年も無事2名の学生が本学医学部実習に参加しました。

初日に高橋医学研究科長・医学部長と看護学研究科(看護国際センター)の鄭教授より激励のお言葉を賜りました。また、両名とも鄭教授と韓国語でお話する姿が見受けられ、緊張した面持ちが少し和らいだ様子でした。キムさんは7月1日より腎臓内科・泌尿器科・小児泌尿器科ユニット、クムさんは7月8日より呼吸器内科・呼吸器外科ユニットに1か月間、本学の5.6年生とともに参加しました。言語の壁を感じながらも、本学学生や先生方のサポートを受け、充実した日々を過ごしていました。

末筆ながら、留学生の受け入れにあたりご尽力賜りました先生、職員、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。



文責：医療人育成課

診療看護師コースが始まりました

2024年4月より医学研究科修士課程診療看護師コースが始まりました。

本学の診療看護師コースは、診療看護師を養成する大学院としては全国で初となる、医学を専攻する医学研究科に設置されています。

「包括的な健康アセスメント能力」「医療的処置マネジメント」「病態の理解」といった医学分野における教育・研究を強化するだけでなく、「熟練した看護実践能力」「看護管理能力」といった看護学教育にも力を入れ、医学研究科・看護学研究科・5つの附属病院が一体となって、より質の高いクリティカルケア領域の診療看護師を養成していきます。

現在、年齢も経歴も異なる10名の1期生が、大学院での学修の成果を医療現場に還元し、医療の質の向上に貢献できるよう、互いに切磋琢磨しながら勉学に励んでいます。

2025年度からは附属病院群にて臨床実習が始まり、多様な臨床場面における判断力と実践力を養っていきます。



文責：医療人育成課

令和6年度初期・専門研修プログラム説明会を開催しました

5月27日に初期研修プログラム説明会、6月17日に初期・専門研修プログラム説明会をwebにて開催し、多くの名市大生・他大学学生の皆さんにご参加いただきました。

5月27日は総合研修センター教員・研修医が中心となり当院の4つのプログラムの特徴を説明しました。救急災害医療センター開棟に向けて、当院の救急医療の機能拡充をアピールしました。6月17日は各診療科の先生方・シニアレジデントの先生方から、それぞれの診療科での研修について説明しました。当院での専門研修や研究の魅力を存分にお伝えすることができたと感じております。

今後も名市大病院群の将来を担う若者の獲得に尽力してまいります。引き続きご協力いただけますようお願い申し上げます。

文責：総合研修センター



【5月27日・兼松副センター長によるプログラムの説明】



【6月17日・参加者へメッセージ語る村上センター長】



【6月17日・救急科による説明・質問回答】

今年も名市大院内ICLS講習会を開催しました

毎年7月に研修医対象に行ってきた院内ICLSですが①受講希望者が多い②院内インストラクターを育成する、ため昨年度から2回開催となりました。

ICLSつまり「突然の心停止に対する最初の10分間の対応法」の重要性・必要性は言わずもがなですが、どんな事でも最初は「手ほどき」が必要です。今回のICLS講習会は初期研修医・歯科研修医の先生方に「手ほどき」させて頂きました。就職して数か月、心停止に出会い怖い思いをした先生、(幸運にも)遭遇せず「いざ」という時が迫るのを心配している先生など様々でしたが、今回も関連病院含め多職種のインストラクターにご協力頂き盛況に終了いたしました。講習前とは違って自信に満ちあふれた、修了式での先生方の顔が印象的でした!

今回は12月13日開催です。受講希望の方、インストラクター希望の方は是非ご参加ください。

文責：コースディレクター 救急科 坪内希規



参加者集合写真(指導者・受講者)



講習会の様子

「名古屋市立大学蝶ヶ岳ボランティア診療班」5年ぶりに壮行会を開催 今夏も1か月間活動!

「名古屋市立大学蝶ヶ岳ボランティア診療班」は、本学公認の課外活動団体(クラブ)として活動しており、今年で27年目になります。北アルプスの蝶ヶ岳山頂(2,677m)直下にある「蝶ヶ岳ヒュッテ」内の診療所にて活動しています。

2017年には、ボランティア山岳医療活動という社会貢献の取り組みに対して、北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会から感謝状をいただきました。また、本活動は、高地医学、遠隔地医療及び環境保全に関する研究と教育の場にもなっています。学生は、診療所で必要となる技能と知識を身につけることを目的に、毎週勉強会を行っています。

新型コロナウイルス感染症の流行により、2020年と2021年の診療活動は中止、2022年から規模を縮小して再開、2023年は学生19名、医療スタッフ12名の延べ31名が活動に参加し、計19名の患者診療(発熱対応やヘリ搬送含む)を行いました。

現在、学生と教員が協力して7月24日の診療所開所に向けて準備を進めており、8月18日までの期間に診療活動を行います。6月2日には、医学研究科・医学部研究棟11階講義室Bにおいて、5年ぶりに壮行会を行いました。

本活動における皆さまのご支援を、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

文責：蝶ヶ岳ボランティア診療班 2024年7月執筆



「ANSURサージカルユニット」に関する記者会見を行いました／名市大病院

2024年4月23日に「ANSURサージカルユニットを用いた世界初の腹腔鏡下胆嚢摘出術」に関して記者会見を行いました。記念すべき第一例目は2024年4月16日に実施しました。ANSURサージカルユニットは朝日インテック株式会社が開発した新規手術ロボットであり、当院が東海地方で初めて導入いたしました。医師の働き方改革が注目される中、ANSURサージカルユニットは「助手の役割」に特化したロボットとして開発されました。3アーム(カメラ+2つの鉗子)があり、2人分の助手の仕事ができます。これまでは助手を兼ねていた上級医が、助手の仕事すべてロボットに任せ、指導に専念することも可能です。若手教育において、手術の質を保ちながら教育効果を高めることが期待されています。今後、症例を重ねながら、前向き臨床試験の計画を進めていければと思っています。

文責：名市大病院 消化器・一般外科



記者会見の様子(左から瀧口教授、間瀬病院長)

眼科・レーザー治療センター開設 1年が過ぎました／東部医療センター

東部医療センターに、眼科・レーザー治療センターが開設され1年が過ぎました。念願の眼科外拡大工事も終わり、最先端の画像検査機器と、白内障・緑内障・網膜疾患を治療できる各種レーザー機器を、一部屋に設置することができ、患者さんの動線も格段に良くなりました。現在、当センターでは、従来の治療で改善しない難治性黄斑浮腫や緑内障に対する低侵襲レーザー治療に、特に力を入れて取り組んでいます。おかげさまで、ナビゲーション機能搭載レーザー装置による治療を目的に、愛知県内外から患者さんのご紹介も多数いただいております。また、若手医師の網膜レーザーの技術の獲得および向上のため、メーカーと共同でレーザー用モデル眼球的の作成にも取り組んでいます。これからも眼科レーザー治療に関して、スタッフ一丸となって治療・研究・教育に取り組んでいく所存です。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

文責：眼科教授・診療科部長 野崎実穂



眼科・レーザー治療センターのスタッフ(写真中央:野崎センター長)

生殖医療センターが開設し1年が経ちました／西部医療センター

少子化の今、産みたい人が産める医療を提供するため、当院に生殖医療センターが発足しました。ゼロからのスタートアップであり、1年が「あっという間」に経ちました。

妊娠に至る患者さんが順調に増えておりとても素晴らしいのですが、その一方で妊娠に至らない患者さんもいらっしゃいます。「どうにかして」という思いがある一方、今の医療では「どうにもならない」という面もあります。医学・医療は進歩しなければなりません。

生殖医療では、カップルの卵子と精子から生まれる受精卵を最適条件で培養し母体に戻します。ただし、卵子と精子の質と数には個人差があります。さらに、卵子毎、精子毎にも、異なります。「質」のよい卵子や精子とは、いったいどのようなものなのか、どのようにすればそれを得ることができるのか。この問いの答えに近づくには、1年という月日は「あっという間」でした。

そんな中、私たちの研究が幸運にも日本アンドロロジー学会で学会賞を頂くことができました。研究と医療を両輪に進み続け、患者さんの「産みたい」という思いに近づきたいと思っています。



文責：生殖医療センター 胚培養士 北館 祐